



福島県二本松市の農家、佐藤佐市さん。



消費者と不安を分かち合い、 風評を乗り越えたい —— 生産者はいま



コープふくしま

原発事故の影響と風評被害によって、福島県内の農業は深刻な影響を受けている。生産者はどのような思いを抱えているのだろうか。コープふくしま・コープmartあだたら（二本松市）の産直コーナーに出荷する産直センターと生産者取材した。



コープmartあだたらの産直コーナー「旬菜市場」。ホウレンソウやキャベツ、白菜などが出荷制限されたため、売場にはネギなどの一部の野菜と加工品しか置かれていなかった。

風評被害と 先の見えない不安に さらされる生産者

東日本大震災によって起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、県内の農業にも深刻な影響を与えている。3月21日以降、福島県産の原乳や葉物類などの野菜は、路地やハウスを問わず出荷制限が行われた。一部は解除されたものの、「福島産というだけで買い手がつかない」「平成22（2010）年産の米ですら、出荷したものが戻ってきてしまう」などの

風評被害にもさらされている。

こういった中、生産者はどのような思いを抱えているのだろうか。3月下旬、二本松市の農家、佐藤佐市さんを訪ねた。コープふくしま・コープmartあだたら（二本松市）の産直コーナーに、あだたら産直センターを通して出荷する生産者の1人だ。

「出荷が停止され、作付けも数週間遅らせるという指示があったため、準備だけはしていますが、今後どうなるのか全く先が見えません。今年の営農計画が立てられないんです。有機認証を取得し、栽培し



3月下旬には、放射性物質を拡散させないために耕運も制限されていた。出荷制限されたホウレンソウや春菊は収穫すらずに放置され、雑草がはびこっていた。

ている作物もあるのですが、今後どのような扱いになるかも分からないままです。このままじゃ、今までの苦労が水の泡になるばかりか、経営が成り立たなくなってしまう」

収穫期を過ぎたまま放置され、雑草が生えるハウスのホウレンソウや春菊を前に、佐藤さんはこう言っていたため息をついた。

作付けしても、出荷できるかどうか……

4月中旬、福島県が県内70カ所で土壌分析を行なった結果、二本松市では稲作や野菜の作付けは可能という判断がされた。あだたら産直センターに加入する210人余りの生産者も、一部の人を除



あだたら産直センター 事務局長 本多芳司さん

き田植への準備を始めているという。しかし、「作付けできたからといって安心はできない」と、あだたら産直センター事務局長の本多芳司さんは話す。

「作付け可能イコール出荷可能ということではありません。原発事故がいつ収束するかも分からないですし、もし悪化して大量の放射性物質が拡散したら収穫はできないでしょう。暫定基準値以上の数値が計測されたら、作物は汚染物質になりますから、それをどこに廃棄するかも大きな問題になる。仮に収穫でき、放射性物質が基準値以下でも、福島県というだけで市場から拒否されてしまう恐れもあります。売れなかった収穫物をどうすればいいのか、その費用は誰が補償してくれるかなども不明瞭なままです。このままでは経済的に立ちゆかなくなる生産者が増えることは目に見えています」

農業県である福島では、例年なら6月にはキュウリが最盛期を迎え、6月以降には桃やサクランボも出荷が本格化する。それらも果たして出荷できるのか、出荷したものを市場が受け入れてくれるのか。

生産者を取り巻く状況は日を追って厳しさを増している。

消費者と生産者が互いの不安を分かち合う

原発事故の影響で、生産者が先の見えない中で生産をしているように、消費者の農産物への不安も尽きない。出荷制限が解かれたことだけで「本当に安全で安心な農作物」と判断していか見極められないことが、風評被害につながっているといえるだろう。

「生産者も、安全で安心できるものをお届けしたいという思いはずっと変わらない

のです。この状況を少しでも好転させるために、生産者が消費者の皆さんと直接お会いしたり、生産現場の情報を共有しながら、互いの不安を分かち合えるような場をつくっていかなくてはと思っています。時間はかかりますが、お互いの思いを話し合い、確認し合う場を持つことが大切なはずです」と本多さんは話してくれた。

原発事故という重大な事態が現実になっている。だからこそ、消費者と生産者がこれまで以上に密接な関係を築き、互いの理解を深めていくことでしか、この事態を乗り越えることはできないのかもしれない。

(文・写真 筑波君枝)



福島県では「がんばろうふくしま! 地産地消運動」として県を挙げて福島県産の農産物をアピール。コープふくしまでは、コープマーケット方木田とコープマーケットの2つの店舗でキャンペーンを展開している。県やJAの職員も、ハッピー姿で応援に駆け付ける。



自ら店頭へ県産いちごを並べる、福島県北農林事務所の平澤茂樹さん(コープマーケット方木田)。